

薬理学教室

当時の教室員としては祖父江勘文教授、伊賀由喜友助手、研究補助員の橋本米子、山中フジ子、前田某女、傭人の吉井浅太郎、浦田笑子、伊ヶ崎千鶴子、給仕の前田政子の諸氏であつた。

被爆時の状況

祖父江教授は研究室で被爆。病院廊下に收容。十一日佐野保教授の自宅へ運び加療中、十六日午後一時頃死亡。他の教室員も教室内で被爆、死亡す。

故祖父江勘文教授略歴

従五位医学博士 薬理学教授

明治二十八年十二月二十四日東京市に生る

大正十一年三月東京帝国大学医学部卒業

大正十一年四月同大学副手になり内科学を専攻す

大正十四年七月同大学助手に任ぜられ薬理学を専攻す

昭和二十年四月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭ひ同月十六日鬼籍に入り恥に殉ず

主なる研究題目

ラツテの可移植性腫瘍の増殖に及ぼすキニーネ及びその誘導体の作用に就ての研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
官 取	祖父江 勘文
教 授	伊賀 由喜友
助 手	橋 本 米 子
化学研究補助	山 中 フ ジ 子
"	前 田 某 女
"	浦 田 笑 子
雇 人	吉 井 浅 太 郎
傭 人	前 田 政 子
給 仕	

思 い 出

祖 父 江 辰 子

主人は昭和二十年五月三日に東京を立ち長崎へと向いました。東京で生まれ東京を離れた事のない主人にとつて敗戦の色の濃かつたあの頃、空襲下に家族を残すという事は心細くもあり心配だつた事と存じます。長崎行が決定してからは一家を上げてとも考えましたが、長崎にも家はなく又一方東京でもヤタラに家を空家にする事は、防空上隣組がこれをゆるしませんでした。この家の事については後日、主人が諫早に居る教え子に依頼すると申してをりました。それでも当時の長崎は極めて静かで、

ノンビリして東京では当り前となつていた防空ズキン、ゲートル掛の姿の主人は教室への行き帰りに皆さんによく笑われたそうです。六月中旬頃一度もどり一週間で又そちらへ参りましたが、それから後次第に長崎も深刻となり、防空壕も掘り始められた様で「長崎までわざ／＼穴掘りの監督に来た様なものだ」と書いてよこした事もあります。大学の建物も廊下などをこわしてお互いの連絡をなくして災害の拡がるのを防いだ様でした。

さて七月にはいり最初の七月十八日には東京へ帰るといふのから始まつて次第に予定の変更があり、とう／＼夏休にはいるまで講義をして、八月の八日には長崎を立つという事になりました。それより以前に東京を立つた日から一ヶ月目に帰るといふ事にしてありましたので……その頃の通信は速達でも十日から十五日間かゝりましたから、この時の様に小刻みの変更がありますと、どうせ便りを出しても丁度立つた後へ着くのではないかと通信を差控えてしまつたので、通信はいつも主人の方からばかりで、私達以上に通信のみを、只一つの慰めとして欲していた主人には、何も出さなかつた事もあり、今でもそれが悔まれてなりません。

さて、八月八日に長崎を立つという事は決定済になりましたから、私達は只管その日待つ中に広島に新型爆弾が落され、続いて長崎にも落されましたが、新聞報道も広島の記事ばかりで長崎の事は少しものらず、気になりながらも一同の気持は、次第に長崎を立つた主人は広島通過の際医師として被爆患者の救護に当たるといふ事になつたのに違ひないという方に向つて参りました。そして心配の中にも安心を見出そうとしたのです。

所が或日、息子の友人が、長崎被爆状況のくわしく出ている新聞を持つて遠方からたづねてくれました。焼野ヶ原と化した長崎の写真、驚ろきなながらも長崎の地名、大きな建物のある場所などをくわしく知らぬ私共には果して主人もやられたか、大学が損傷を受けたかなどわからず、近くにおすまいの当時東大薬理の教授、東龍太郎氏をおたづねして色々お話ししたりしました。こうした不安の毎日を送る中、八月の二十五日頃でしたか、八月十六日消印の長崎からの主人の手になる研究原稿が表書も主人の文字で送られてきたので、私達の長い間の憂は一辺に消し飛んでしまいました。何しろ消印が終戦の翌日であり、外も中も主人の文字である以上、主人の存命は確実と思われたからです。それからは、家族一同すつかり朗らかになり、九月二日の「チ、スイサイフミ」といふ電報を玄関へ取りに出るのさえ、何かの朗報と飛んで出た程でした。しかし右の様な電報で一瞬私達は絶望の真中に落されてしまいました。それから一、二時間した頃、主人は佐野保様の抱く花びんの中の一片のお骨となつて帰宅したのでした。電報はその時より十日も前に打つて下さつたのだそうです、その頃は電報さへ十日もかゝつたのでした。此処ではじめて佐野様から主人の長崎に於ける被災から死ぬまでの話を承りました。角尾学長様は、東京からの御帰途広島を通過の際、新型爆弾の惨状を目撃されて八月八日、一同を集められ大いに警戒する様話されたとの事、しかもその翌日、同型の爆弾が長崎にも落されたのでした。

主人は八日午後長崎を立つべく駅へ行つた所、小倉に貨車脱線があつて復旧に手間取るとの事で翌日に延ばした由、九日の午前十一時警報解除後にこの爆弾は落され、一瞬にして長崎は死の町と化し講義をうけて

いた学生はそのまゝの姿で白骨と化し、丁度用事で外出された先生の何誰かはそのまゝ行方知れず、主人は帰京の時を待つ間を研究室の椅子に横になつていた所でしたが、落ちてきた梁の間をくりぬけて外に出て裏山に二晩をすごした由、佐野様は御幸運にも田舎の御来客の為め当日は大学を休んで御自宅にいらつしやつた為め災害をまぬがれ、先生方の御救済に当られた由裏山に祖父江が居るとのしらせにさがされたが、結局、焼残つたコンクリートの病棟の廊下（産婦人科？）に筵をのべて横たわる主人を見出し早速担架で御自宅へお運び下されたそうです。

この担架は学長様の為めに用意されたものでしたが、既に学長様の御病状は悪く、御家へ御運びする事さえ危ぶまれてそのまゝ横穴の中で御治療を続けられたと承りました。一方主人は佐野様方で御手厚い御看護をうけ、三日目には大変よくなつた由。受けた傷もたいした事なく大きな傷は、額と手首に二種位のものがあり、他はカスリ傷で、これは大分アチコチにあつたと記憶します。

暑い折としてワイシャツ一枚にズボンの軽装だつたので二晩の野宿に何方かに羽織を一枚頂いた由で、二日間食事もなく水を呑んだりして下痢がひどかつたそうでしたのでした。

三日目に大変軽くなつてその節、東京の私共へ手紙を書いてよこしました。勿論この手紙もお骨が家にもどつた時よりずつとくあとになつて配達されましたが、内容も自分の死は夢にも予想せず早く東京へ帰り度い事、佐野様御一家に大変御世話になり感謝している事、新型爆弾は大変な威力だから気をつけて必らず防空壕に避難する様にとの注意などでした。

さて、その翌日の十四日、夕方、佐野様が御帰宅なさると奥様が走り出られて、早くくとの事、主人が息苦しい為、自分で切開するからナイフでも貸してくれる様にと奥様をこまらせたのだそうです。申遅れましたが、その以前からあの頃の皆様の共通の症状のクチビルが乾き口中が腫れていたとの事でした。佐野様は早速枕頭に行かれて切開をするなら消毒もせねばならぬ、ともかくと云われて何やら注射をなされ、淋しい病人の気分も先生のお傍で静まつて切開もせずに済んだとか。しかし病状は次第に悪化し、十六日の午後一時頃息を引取つたそうです。意識は最後までシツカリしていたそうです。その時、佐野様はもう一人の御教授の御看護を受持たれ、御症状も殆んど主人と同様で主人と前後して亡くなられたそうです。

御名前も失念致しましたが、長崎へ御住居をお持ちで御家族もをられ、御自宅で亡くなられたと承知します。

この先生も、主人も佐野様のお手で大学わきの空地で荼毘に付され骨壺さへない折として御手持の花びんに納めて御持ち下されたのでした。

こうして昭和二十年の九月二日、その日まで主人の帰宅を待ち侘びた私達は一切の希望を空しくせねばならなくなつたのですが、わからないのが一時私達を非常に安堵させてくれた十六日消印の原稿の件でした。どうしても疑問がとけず、とうく消印局へ事情をはなして調査を頼みました所、程経て返事が参りました。それによれば当時下宿住いの主人の為、研究室で彷彿く女子の方がおり、九日朝、御両親は今日あたり危ないから休む様申されたのを、その方は今日は先生が東京へ立たれる日だから行かねばならぬと云つて、出がけに前もつて主人から投函を託

されていた前記原稿包みを御両親に頼んで御自分は大学へ、御両親が十六日に投函して下さつたのだそうです。勿論、そのお嬢さんもギセイになられました。

(東京都練馬区下石神井二ノ一二八九在住)

故 祖父江勘文博士の追憶

小 林 芳 人

私が博士を知つたのは随分古いことで勿論学生時代のことである。第一高等学校当時からその優れた才能はクラスを異にする我々にもよく知られて居た。大正十一年東京大学医学部卒業後当時の稲田内科に入り、次いで大正十五年七月に薬理学教室に入つて来られた。私が同年十月に薬理学教室へ入つたから殆んど同時に薬理学の勉強を始めた様なわけである。その後博士は研究生活を一時中断するの止む無きに到つた。その当時の事情に就いて私はよくは知らないが、経済的問題があつた様に聞いて居る。浅草に開業してからの博士の实地診療医家としてのすばらしい名声は、その門前常に市をなし往診には自動車で飛び廻つても時間が不足であつたと云う様なことでよく窺える。収入の点でも東京都内の開業医中屈指のものであつたらしい。

博士が再び薬理学教室へ現われたのは昭和九年であつた。診療の余暇に研究を再び始め度いと云うことであつた。そこで選ばれた研究は「悪

性腫瘍の化学療法」と云う問題であつた。診療の仕事に疲れた身心でこの大きな仕事に取り組むことは大変だと人は思うかも知れないが、博士にとつては多年の希望が実現した喜びで実にハツラツたるものであつた。この頃から薬理学教室の玄関には高級自動車が行き止まる様になつた。そのとまる日もだんだん殖えて行つた。博士が診療を他の人にまかせ教室へ来る日が殖えて行つたのである。研究も次第に進展して行きその発表は薬理学会に於て異彩をはなつ様になつた。

この様にして博士が次第に診療室から研究室内へ移つて来て居る中にぶつかつたのは、長崎大学薬理学の後任教授の問題であつた。博士が第一の候補者として挙げられた。これは博士にとつて大きな問題であつたに違ひ無い。博士はこの時、従来の診療関係の仕事は一切やめ研究生活に専念する決心をしたのであつた。昭和二十年東京では空襲のはげしかつた当時の長崎医科大学長角尾晋博士が私を訪ねて来られ私から祖父江博士の意向をただし、その結果同年春に博士の長崎就任が決定した。五月頃から博士は長崎へ出掛けて研究室の整備に掛つた。当時は東京から長崎迄の旅行は仲々容易でなかつた。絶えず空襲の危険にさらされて居た。博士の決意の如何に堅かつたかが解る。

長崎に原爆の落ちた八月九日は博士は大学の研究室内に居たそうである。その時は大した負傷でも無かつた様に聞いて居る。亜急性的原爆症の経過をとつて八月十六日に亡くなられて居る。八月八日の東京行切符を持つて居たと後で聞いたが、何かの都合で出発を一日延ばしたものと見える。誠に不運な一日であつたと思う。

博士の終生の仕事として惜しくも中絶した悪性腫瘍の化学療法に關す

る研究発表は博士の遺稿として最近発表された論文を含めて欧文及び和文合せて十九篇に及ぶ。細胞毒であるキニーネが生体内では腫瘍に対して細胞毒としての働きを示さないが、これに腫瘍嗜好性を持つ化合物を結合させることによつて目的を達するのでは無いか。その為めには薬物の生体内分布とこれに及ぼす色々の影響とが大きな問題となる。博士によつて報告されたこれら十九篇の報告には如何に見事にこの問題が着々と解決されて行きつゝあるかを示して居る。

博士にとつて長崎への赴任はこの研究完成への一歩前進であり、今後の輝かしい成果が期待されて居たのであつた。十年を経た今日当時を回想して感慨深いものがある。

(東大医学部薬理学教室)

故祖父江勘文教授の業績と思ひ出

中 沢 与 四 郎

祖父江教授の最初の論文は昭和三年に発表されたピリルビン反応の成因に関するものであるが、日本薬理学会において数年間に亘つて相續いで毎回発表せられたのはラツテの可移植性腫瘍の増殖に及ぼすキニーネ及びその誘導体の作用に就ての研究であり、恐らくは長崎医大に赴任せられてからも続けられていたものと思う。

祖父江教授は腫瘍の増殖速度を測定する方法を新に考案し、キニーネ

等がこの増殖を抑制することを発見し、その機序に就ては螢光を利用してキニーネの向腫瘍組織性を明にし、更に種々の臓器及びこれらに生じた肉腫におけるキニーネの分布を追及した。本研究が完成せられたならば腫瘍の療法に新分野が開かれたものと考えられ、教授の急逝は斯学のため誠に痛恨に堪えない。

私は偶然にも祖父江教授の後任者となつたが、同教授にお目にかゝつたのは年に一回の薬理学会の席上だけで個人的なおつき合ひは全くなかつた。だから私は祖父江教授の思い出を書く適任者ではない。それにもかかわらず筆をとつたのは、学会を通じての短い印象が今なお私の脳裡に深く残つているからである。祖父江さんは美髯をたくわえた白面の貴公子で、学会にはいつもハンチングをかむつた軽装で来られ人目をひいた。そして又会場では当時としては珍しいカラスライドを御持参のライカープロジェクターを使つて頗る明快に説明し聴者をして感銘せしめた。このような印象は恐らく私だけでなくその頃の出席者のだれもがいだいたことであろう。

祖父江さんと二人で初めて話したのは昭和十八年秋東京で薬理学会の終つたあと、地下鉄のホームで電車を待つてゐるときであつた。私は自分の行先の道順を彼にたづね、ついでに二言三言語り合つたが、そのとき小さい声で物静かに話される祖父江さんの態度は演壇に於ける声高く少し威圧するような感じとは全くちがつていた。私は意外に思ったが、同時に祖父江さんの温和な人格の一端にふれたように感じた。しかもこれが祖父江さんとの最後の面接となつてしまつたのである。

戦後(昭和二十五年)長崎大学で薬理学会西南部会が開かれたとき東

大名蕃教授林春雄先生が東京からわざわざ出席された。突然先生は原爆犠牲者の墓にお詣りしたいと言い出され、次の予定時間が迫っていたので、私は大急ぎでグピロが丘に先生を御案内した。当時はまだ全く整地されていらない道なき瓦礫の上を御老体の林先生は大股で歩き一気に丘の上に行かれた。先生の御元氣さは私とお伴の熊谷教授（東大）は息をきらして辛うじてあとに続いたほどである。慰靈碑の前で先生は敬しく長い黙禱を捧げられた。私も頭をたれ乍ら祖父江教授のことを思つた。そしてこの時、先生が戦後の未だなお諸事の不自由をしのんで長崎までその御老体を運ばれた目的は、浦上のこの地下に眠つておられる先生の愛弟子祖父江勸文博士の冥福を祈るためであつたことを今更の如く見たのである。祖父江さんは林先生がどんなにか期待しておられた俊秀だったかと思ひ又その美しい師の愛をしみじみと見た。そのお元氣だった林春雄先生も先年長逝された。天国で祖父江さんと長崎の話をしておられるような気がしてならない。（昭和三十年八月八日記 薬理学教室）

由喜友

伊 賀 久 子

ああ、忘れ様としても忘れられない思い出の八月九日の原爆記念日が、又近づきました。

ことに今年は十周年とて、思い出も一入で御座います。十年前の此の

日は、遠くはなれた四国の松山で、毎日の空襲に仕事も手につかず、ただ逃げる事のみ考えて居りました。老母は田舎へ疎開させ、主人も病中だつたので多くは田舎に居り、一人私のみ家を守つて居ました。それで自分は何日死ぬかも分らぬと思つていましたが、息子が死ぬ等とは夢にも思いませんでした。其時長崎へ新型爆弾が落ちたが、曇で被害はなかつた、とのニュースを聞きましたが、自分の方が不安なものですから、息子の心配をするひまもない有様でした。其の内十五日の休戦となり急に氣にかゝりまして方々手をつくして聞きました。始めはちつとも分りませんでした。そのうち長崎大学は全滅との事を聞き、それから苦心して汽車の切符を求めて出発したのが八月二十一日朝、翌日長崎へ着いたら想像以上の惨状で、由喜友の死も確認されて遺骨を受取りました。余りの驚きに始めは泣くにも涙も出ませんでした。お骨をもらつて休んで、始めてわれにかえり泣けて参りました。それから暑い中をお骨をいただいて、市役所や、警察へ行つて手続きをすませ、こんないやな土地には一時間も居るのはと、直ちに汽車に乗つて帰途につきました。其の往復の汽車中の苦しみと、かなしみ。私ごとき者の筆にては、到底書き表わす事も出来ません。帰つてお葬式をすませました処、主人が落ちたんの余り床につき、翌二十一年春死亡致し、つゞいて二十二年老母が亡くなり、只今は一人で御座います。余り次々の不幸に、私の氣も何も何やら分らぬ様で御座いましたが、今では落ちつき、此の記念日に長崎までお参りに行くのを何よりのたのしみと致し、故人が生きて居た時会いに行く時の様な気持ちで、長崎まで出掛けます。之を老後のたのしみに、之からもボツ／＼行かせて頂きます。（松山市南立花町在住）